

共同研究 ● 非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ (2010-2013)

共同研究の醍醐味は、当初の想定とは違う方向へ認識が導かれる楽しさである。始める前から結論の見えているような研究ならばやる意味がないので、ここでは問題にしないが、人間研究に取り組むそうでない共同研究の場合には、自分が大切にす代え難い個別のフィールドワークの経験を資産として、そこから感受性と直感を育ててきた研究者たちが集うわけだから、空中分解するか、あるいは予想もしない新しい方向が生み出されるか、どちらかだろう。それは設定するテーマ次第である。テーマを種子にたとえるなら、芽を出す種子と芽を出さずにそのままになってしまう種子とがある。

本プロジェクトの種子は「非境界」というキーワードである。前回の文章(本誌『民博通信』No.132)はプロジェクト開始直後だったので、種子の説明に終始せざるを得なかったが、今回はその後開かれた計4回の共同研究会の様子をご報告できる。種子は芽を出しつつある。冒頭の「共同研究の醍醐味」を味わえる状態になってきたように思う。

議論の具体的な展開を述べる前に、これまでの4回の研究会での発表タイトルを列記しておく(副題省略)。

- 先発グローバリズム研究の意義(奥野克己)
- 「非境界型世界」という視座に関わる問題群(斎藤剛)
- シリアのクルド人コミュニティにみる移動、労働、コネの実情(宇野昌樹)
- 言語からみたオマーン人の人間関係(大川真由子)
- つながる難民・移民と国際移動(錦田愛子)
- 人文学における科学用語使用の陥穽(小田淳一)
- 薬物・部族・バザール経済(大坪玲子)
- 国境・国籍・民族・個人(新井和広)

まず奥野が研究会の冒頭に再確認を求めたのが、周囲から独立した「自己」というデカルト的イメージの放棄であった。「自己の外に他者がいる」、「自己が何事かを行う」、「自己がどこそこにいる」、「自己の周りをモノが取り囲む」といったいわゆる西欧近代が生み出した「自己(=意識)」、という特殊なイメージは払拭する必要がある。まず「自己」と「外部」のあいだに設置された境界を取り払えというわけである。自己というのは身体を含めて周囲と一体のものであって、多面的・重層的かつ可変的な姿を現す。しかもそれはおそらくはどこまでもつながってゆくことのできる連続体になっていて、よく言われるような社会や文化といった体系や構造に吸収されるも

のではないという。奥野はそうした現実を「場」と表現し、「場」は常に「若葉マーク」だという。つまり人はたとえいくつになっても、またどんなに慣れ親しんだ場所や人々のあいだに生きていたとしても、常に素人として、あるいは初心者として「場」を生きることになる。そうした「場」のつながりが近代以前からの先発グローバリズム(非境界型世界)を生み出してきた。

さてそうになると、こうした連続体としての「非境界的」な世界は中東やその周辺地域の特徴であって、近代西欧や日本は違うのではないか、という疑義が提起されよう。そこで斎藤はそうした疑問の出し方こそが「境界的思考」なのだと強調する。「非境界型世界」がどこかにあって、別の場所には「境界型世界」がある、といった二項対立的かつ本質主義的な発想その

ものがすでに「境界的」なのだ。と。「非境界型世界」がどこかにあるという局所固定化の発想も、また逆に「非境界型世界」の遍在を主張するような普遍化の発想も、ともに妥当性を欠くものであり、重要なのは、世界の連続性が、経験を成立させる「場」の特殊性と矛盾することなく接続されている状況を理解することであると論じた。おそらく斎藤のいう「場」と奥野のいう「場」とは重なってくる。そして、あ

らゆる方向からの参画が可能な無(多)中心の開かれた「場」のネットワークこそが「非境界型世界」の姿だと述べた。

「非境界型世界」と「境界型世界」を対立的に捉える視点については、新井が斎藤とは別の実証的な立場からやはり批判を加えた。ハドラー(アラビア半島南部地方の人々)とそこから東南アジアへ移動した人々を追い続けてきた新井は、インド洋を越えたハドラーの地理的拡大は18世紀半ばから20世紀半ばまでのイギリス植民地主義の隆盛と軌を一にしており、イギリスとオランダが東南アジアの植民地を境界化し、民族や人種を区分するシステムを打ち立てたのをうまく利用して、境界を越える自分たちの利益をフレキシブルに生み出したと指摘した。つまり境界型世界と非境界型世界はオーバーラップしていたのではないか。むしろ東南アジア諸国が独立して国境の壁を高くしてからの方が、ハドラーは分断され、移動の自由を奪われ、辛酸をなめることになったのだ。と。非境界型世界と西欧植民地主義を分離・対立させるのではなく、それよりもむしろ、ポストコロニアル期と境界的システムの結びつきを示唆する新井の指摘は検討に値する。

同じように、植民地主義が結果的に非境界型世界を活性化させたのではないかと思える事例を大川が提供した。19世紀



ザンジバル(タンザニア)の「オマーン・アラブ」の末裔(大川真由子撮影)。



イエメン南部ハドラマウト地方内陸部の町タリムにあるホテル（現在は改修中）。シンガポールで富を築いたカーフ家によって建てられた（新井和広撮影）。

後半から20世紀半ばまで、イギリスが植民地統治を通じて、まさに境界的思考の産物である人種、民族、宗教、国家の壁を東アフリカに造出したとき、それまで東アフリカのザンジバルに暮らしていたオマーン出身の人々が、作られた壁を突き抜けようとさまざまな試みをした様子を、フレキシブルな言語運用の局面分析を通して詳述した。非境界型世界の歴史的展開を正確に押さえるためには、こうした大川や新井の指摘を尊重し、とりわけ植民地主義との関係を見直さなければなるまい。

そして現在、外からもたらされた強烈な境界的政治状況になお苦しむパレスチナの人々が、その境界を無効化するためにいかにさまざまな方法を用い、さまざまな人的ネットワークを開発・維持しようとしているかを分析した錦田の事例も、境界的な制度が非境界の世界を活性化させている証左になろう。同じように宇野は、境界的政治状況がかえって人の移動を促し、強固な人的ネットワークを構築させる様子を、シリアのクルド人の職探しを通じて明らかにした。

ここまでの議論を強引に整理すれば、新井、大川、錦田、宇野の4名は「非境界型世界」と「境界型世界」の密接な関係を、現象に即して議論しているように思われる。その点が、自らの思考方法をも同時に問題にする奥野、斎藤と若干スタンスを異にするところであろう。

いずれにせよ、ここで思わぬ方向を打ち出したのが大坪である。「非境界型世界」の屋台骨となってきた「ネットワーク」のイメージを問うたのである。ネットワークは境界を越える手段として、堅い信頼関係に基づくプラス機能のイメージを持ってきた。しかし大坪は人と人の関係を切ってゆく「浮気性」の重要性を指摘したのである。地縁や血縁、部族などによる人間関係に縛られることなく、自由に人間関係を組み替えてゆくことがよい商売につながることを、イエメンのカートという嗜好品（薬物）の商売に即して指摘したのである。つまり人と人の関係は、緊密に結びつく方向だけでなく、逆に関係を断ち切る（あるいは休止する、棚上げする）軽やかさを持

つことによって、広がり確保できる。つながることよりも切れること、この逆転の発想は、ネットワークという分析概念が、本来動的である人間関係を静的なものに固定してしまうという懸念の表明にもつながった。

この論点を補強したのが小田で、情報科学の立場から、「ネットワーク」という語をはじめとする科学用語を人文学で隠喩的に用いることの危険性に警鐘を鳴らした。ネットワークという語は、点と線によって紙の上に具体的な形として描けなければ、それは単なる隠喩に過ぎず、何も説明しない。ネットワークはすべて数学的に定義可能でなければならず、とりわけ使用者が「隠喩度」を明確に認識していない場合に、それは最悪なものとなるのだと小田はいう。

となれば、ネットワークを人の結びつきとイメージするかぎり、それは大坪が危惧するように、動的に移り変わる自在で不定型な人間関係を表現するには不向きなものとなる。しかもネットワークは「システム」を上位概念として持つという小田の指摘を受け入れれば、奥野のいう「若葉マーク」や斎藤のいう「場のつながり」を理解する上でもこの語は障害になろう。どうやら「切れる」「若葉マーク」「場」といった語は、予測不可能性や偶然性といった語ともつながって、今後「非境界型世界」解明の鍵になりそうである。

最後に、本稿は発表者の意図を誤解している箇所が多々あるかもしれないので発表者にはご容赦いただきたいが、じつは誤解や無理解ということもまた非境界型世界に必須の要件なのではないかとひそかに思っている。それについてはまた触れる機会があるだろう。

#### ほりうち まさき

成蹊大学文学部教授。専門は社会人類学。中東・北アフリカの社会と文化を研究。著書に『アラブの音文化：グローバル・コミュニケーションへのいざない』（共編著 スタイルノート 2010年）、『世界の砂漠：その自然・文化・人間』（共著 二宮書店 2007年）など。